

母校創立100周年に向けて OB会を盛り上げよう!



県陵演劇部の思い出!



演劇部OB・OG会 高22回 安藤 久美子

私が母校に在籍していた頃は、各学年女子が15人もいない位の人数の時で、そこに22期の女子がいきなり36人も入学したので、学校は急遽女子専用設備を用意し、また各クラブは、女子獲得に争奪戦を繰り広げていました。そんな中で、私は演劇部に入部し、頼もし過ぎるくらい怖い感じの男子上級生と優しい女子の先輩に囲まれ、褒められたり

叱られたりしながら、活動していました。 ススキ川の対岸まで聞こえないと何度も発声練習させられたり、千鹿頭の山の上まで歩かされたり、ピリピリしている公演直前では、些細なことでも言い争ったりと数々の懐かしい思い出が頭をよぎります。 そんな怖かった先輩でしたが、休日には、ハイキングにつれて行ってくれたりして、コミユニケーションを図ってください「本音は優しいんだな」と感じたこともありました。

そしていつしか県陵80周年記念事業の年を迎え演劇部OB会を発足、

私は東京支部をお受けして、古い記録を頼りにまったく知らない先輩から後輩迄お声掛けをし、結果大勢の方にお集まりいただき、当時の公演の演目や苦勞話等を交え、多岐に渡り語りあっていただきました。

このメンバーで、公演やりますよ! などと意見も出て、



和やかな充実した会となりました。

現在は女子の人数が増え、過去の男子校の雰囲気はどこにも感じられなくなった演劇部ですが、皆色々な思いを持って取り組んでいることと思います。卒業しても、OBとして一緒に活動していただきたいと願います。

先輩が立ち上げてくださったこの会を引き継ぎ、100周年に向けて、更に後輩OBに引き継いでいき、県陵演劇部OB会として新たに絆を深めたいと思っています。



本年(第3回目)は7月30日(土)に開催を予定



剣道部OB・OG会長 高15回 原田 武邦

剣道部同窓会は、一昨年七月に多くの関係者のご尽力により県陵で竹刀を握った者五十名が集い情報交換や、親交を深めました。また、昨年十一月には「県陵剣道部OB・OG会」の名称も新たに二十年ぶりに復活しました。

総会では名誉顧問に高校剣道部創立者で九回卒の福永優氏、名誉会長には十七回卒の本郷一彦氏を選出。幹事には十五回から三十六回卒と世代を越えた十一名が就任し会の運営を行うことになりました。懇親会は高校十一年から五十六回卒と親子以上の年齢差の者が酒を酌み交わし和気合い合いに歓談してました。

さて戦後、学校での武道は連合軍の占領により禁止されていましたが、サンフランシスコ講和条約により解除され、県ヶ丘高校の剣道部は昭和二十九年に創立されました。 福永優大先輩から設立時につ

538年 3月 前列右から4人目が筆者 後列右から3人目が本郷名誉会長



ので紹介いたします。

「思い返せば県ヶ丘高校一年生に入った夏に叔父から剣道部を作ったかどうか」との話が出て、(故人)和佐田徹三範士にご指導を依頼し、昭和二十九年九月に有志二十四名で剣道部を始めたものです。

当時の道場は昭和天皇の写真を飾った講堂で、卓球部と半分ずつ使っておりました。稽古着だけで素振り、形(小手・面・胴)を練習し、防具をつけられたのは、先輩方にお願ひした十一月頃だったと記憶しております。その後数々の大会に出場し良い成績を残しました。

(中略) 朝は登校直後三十分素振り、

昼も素振り、放課後も稽古で、家に帰った後も市内に出稽古に出かけ毎日が剣道づくめでした。

(中略) 十六歳から始めた剣道・居合道あれから六十年を経過しましたが体に沁みついています。『現在では実技はせずに口頭で指導に精を出しています。人生気力の一語ですと締めておられませ。又、昨年は十回卒滝沢昌史教師七段が第三十七回全日本高齢者武道大会で準優勝の快挙をなされております。』

末筆ですが、貴重な県陵同窓会報に「剣道部OB・OG会」の紙面を割いて頂き、深く感謝御礼させていただきます。



青木昂氏(高64回) プロ野球審判に

県陵OB!!

元日の市民タイムス特別号の一面に、「青木昂さん1軍審判に」の記事が大きく掲載されました。 青木昂氏(22)は、松本県ヶ丘高校野球部OBで、現役時代は投手として活躍しましたが、練習試合で審判は「試合を動かしている」という感覚にとらわれて以降、プロ野球の審判員を目指してました。中信で初、県陵野球部OBとしても快挙です。

NPB(日本野球機構)は、平成23年に審判の採用方法を見直し、その対象をNPBが開設するアンパイア・スクールの修了者のみとし、契約方法も、独立リーグなどで研修を積む研修契約、2軍で技術を磨く育成契約、そして、1・2軍の試合に出場するNPB契約となりました。 青木氏は、大分の専門学校で野球を専攻し、1年次にメジャーリーグのアンパイアカンパに参加。2年次には四国アイランドリーグで審判を務め、その年、第1回となるアンパイア・スクールの修了。高評価を受けた青木氏は最終試験となるプロ野球キャンプに臨み、育成契約となりました。

育成審判員は「3年をめどに1軍に昇格できるか判断」されるのだそうですが、青木氏はイースタンリーグの2年の実績でNPB契約を勝ち取ったのです。 NPB契約とは、1軍戦に出場できる権利を得たということ。 NPB審判技術委員長は、「1軍の聖審になるのに3、5年、球審となると早くても8年というところでしょう」と、その厳しさを語っています。

当面、2軍戦を中心に厳しい世界で闘っていく青木氏ですが、NPB審判員としてふさわしい人間になるために、仕事以外の面でもあらゆる方への気配りをできるように勉強していきますので、応援の程、よろしくお願ひします。と、誠実さあふれるコメントをいただいています。 早く1軍戦での晴れ姿が見たいものです。皆で応援しましょう。県陵の甲子園出場も願ひしながら...

(高30回 守屋千秋)